審　査　の　結　果　の　要　旨

氏　　名　　新　妻（月　原）　淳　子

本論文は「近世駿河国における建築普請活動に関する研究」と題されたもので、江戸時代における駿河国の建設活動の実態を研究したものである。駿河国は幕府の直轄領であって、幕府の営造組織が深く関わり、まだ同時に地元の工匠が活動するという二重性に大きな特徴がみられる。

本論文は、全４部からなり、序、第一部、第二部、第三部、第四部、結で構成される。

序章では、現在までの近世の工匠史研究の概要を述べ、本研究のもつ研究史上の意義について触れる。

第一部（全３章）では、駿河国の中心地駿府における建築普請活動について論ずる。第一章では、駿府城下町における職人と職人集団の集住形態を明らかにした。また、大工講関係史料から、大工組の構成や規定の変遷についても明らかにした。第二章では、主要な公儀作事として駿府城、久能山東照宮、静岡浅間神社を検討した。前二者は家康の大工棟梁中井大和守正清が担当し、後の修理も幕府作事方・小普請方が行った。後者は家光が創設したが、現在の社殿は、文化元年から幕府の工匠と諏訪の彫物大工立川一門が再建したものである。第三章では、江戸時代を通じて活躍した駿府の棟梁家について論じた。花村与七郎家は、家康在城時から長期にわたって、駿府城、久能山東照宮、静岡浅間神社の修営を担当した。幕府の公儀作事に地元の大工がどのように

関わってきたのか、明らかにすることができた。

第二部（全２章）では、駿河国とその周辺における建築普請活動について論ずる。第一章では、遠州一宮・駿州村山浅間神社は幕府作事方大棟梁甲良豊前宗賀の指揮下で同時に造営が実施され、花村与七郎も関与していたことが明らかになり、さらに江戸町棟梁六名と遠州一宮の棟梁高木氏らが参加していたことも判明した。第二章では、現富士宮市地域の普請活動を棟札などから検討した。公儀作事にかかわった大工は登場しない。身延大工、下山大工の活動は良く知られているが、隣接する甲州河内地域の大工の進出も明らかになった。また、甲州大工と駿河の大工の協同作業も確認された。富士川が両地方の建築文化の交流に大きな役割を果たしてきたことが実証された。

第三部（全２章）では、建築普請に用いられた木材と石材の流通について論じる。第一章では、駿河、遠江、伊豆は豊かな山林に恵まれ、天竜川、大井川、安倍川、富士川の四大大河の上流域から大量の木材が供給されたことを明らかにした。河川を利用して筏下げされて、廻船で江戸、大坂など各地へ運送された現地の実態が明らかになった。また、伊豆から算出された石材は「伊豆石」と呼ばれて重用され、また伊豆西海岸の重寺村から駿府城、久能山東照宮へ搬送されたことを明らかにした。第二章では、内浦湾の内部淡島産出の石材「あわ島石」が駿府城に使用されたことを確認した。伊豆産出の石材は「伊豆石」と総称されるが、安山岩と凝灰岩の二系統あって、安山岩系が「伊豆堅石」、凝灰岩系が「あわ島石」と推定する。

第四部（全２章）では、駿河国とその周辺地域の寺社造営における公儀作事について概観し、幕府作事方・小普請方の下で、どのような組織で建築普請活動が実施されたのか総括した。駿河国とその周辺地域の公儀作事は、作事方大工頭・被官・大棟梁および江戸町棟梁によって見分・見積・修営が行われ、そこに駿府・遠江などの棟梁が協同していた。特に、駿府棟梁花村与七郎は、元禄・宝永期には、作事方大棟梁甲良豊前宗賀・宗員とともに修営に参画し、宝永期の駿府城修理では、「駿府町棟梁組頭」として参画し、江戸町棟梁筆頭頭の河合利兵衛と同格であったようだ。

以上を取りまとめるに、駿府を中心とする駿河国とその周辺地域における近世建築普請活動に関する広範な調査から、幕府方や地元工匠たちの各建築への関与の実態が明らかにされたといえよう。

本論文は、近世初期から末まで、駿河国とその周辺地域の建築普請を対象にして、それに関わった大工を中心に広く研究を進めた。用いた素材は、実際に現存する遺構、各地に所蔵される文書群、さらに棟札など多岐にわたる。本研究によって、駿河国とその周辺において、幕府の直轄地としての幕府方作事組織の活動と、地元の大工集団とのかかわり、またその周辺における建築普請活動をも含めて全体視することができるようになった。他の地域における江戸時代の大工の建築普請活動を研究する上で、大きな刺激となるであろう。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。